文芸思潮短歌季評

今号から、短歌批評のページを始めることにした。大手の新聞の「日曜歌壇」に載る短歌のあまりのひどさに、これをしっかり指弾し、本来の短歌の方向を示すべきと考えたからである。まず、どのような短歌が、大手を振って、新聞紙上を賑わしているか、そこから始めたい。

直近の六月五日の朝日日曜歌壇から拾ってみる。

食料の配布に並ぶ長い列キーウではない池袋です
（馬場あき子選）

河川敷、空き地、公園いつからか集いて泳ぐ鯉のぼりかな
（佐々木幸綱選）

飲み終えし散薬の紙で鶴を折り丹頂鶴が何羽もできる
（高野公彦選）

返本の荷造りしてる本屋なり本が紙にて刷られるうちは
（永田和宏選）

また、この六月五日の朝日歌壇には一首しかなかったが、特に佳いとされる一首には☆印が付けられている。

☆戦争は話題にならず静かなる事務所に響くコピー機の音

また昨年のもので、同じ☆印のついた歌に

☆もう四月もう二年生キャンパスで一年生を部活に誘う

があり、これは御丁寧に馬場あきこ、佐々木幸綱、高野公彦三人の選者が☆印を付けている。

これらが短歌だろうか。情緒もなければ奥行も余韻もない。短歌としてのあまりのレベルの低さに、驚きあきれるばかりである。中学生でももっとマシな歌を作るだろう。

もともとこういうレベルの短歌しか集まらないのか、それとも中には短歌の本来の趣きをも備えたものが集まっているのに、この類いのものだけが選ばれているのか、理解に苦しむ。後者だとすれば、これは選者の責任であり、選ぶ眼がないということになる。

恐るべきことに、この傾向は、朝日新聞だけでなく、読売新聞、東京新聞にも共通している。公器と見られる大手の新聞が、揃ってこの傾向にあるとすると、いかにこれらが短歌の主流と見做され、本来の姿を歪めてしまっているか、ゆゆしき事態に陥っていると見なければならない。

万葉集から始まり、古今、新古今と続く日本の伝統の、奥行きある短歌はどこへ行ってしまったのか、正岡子規や齋藤茂吉の近代短歌の深くまた高い言語造形はどこへ行ってしまったのか、危ぶまれずにはいられない。

ここであらためて本来の伝統短歌を思い起こしてみたい。

正岡子規の代表作二首と茂吉の代表作二首を並べる。

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

松の葉の葉毎に結ぶ白露の置きてはこぼれこぼれては置く

木立より雪解の滴（しづく）落つる音聞きつつわれは歩みをとどむ

死に近き母に添い寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる

言葉に込める思いの深さや、天地宇宙の生命の息づきがここにはあり、世界や生きることを広げてくれる。短歌にはこういう深い共感によって響き合う共鳴の作用があるはずなのに、現代の新聞短歌は、これとはまったく逆の方向へ向かい、ますます痩せ細り、枯渇していくように見える。

一面では、時代に迎合しすぎる新聞短歌編集部の責任も大きいように思える。

俳万智の「サラダ記念日」などが一世を風靡したあたりから、こうした短歌の傾向が強まり、軽い浅薄なものがもてはやされるようになったことは否めない。

表層的な便利さが社会全般を被い、お手軽な、浮薄なものが流行し、それによって言葉そのものが力や強さを失っていった時期と重なる。

しかしすべてがこれに飲み込まれ。覆われていったわけではなく、「あららぎ」などの伝統を受け継ぐ地方の短歌誌には、まだまだ強靭な言語の生命力が引き継がれている。

文芸思潮に寄せられた短歌誌のなかに、これらの伝統に根ざした、真の生命に繋がる力の漲った歌が見られる。

沖縄県の**「黄金花」**は「首里城消失特集」を編みながら、気骨のある短歌を集めている。「黄金花」55・56号から——

つつがなく一日（ひとひ）過ぎゆく厨辺に著く香りぬグアバの実ふたつ
上江洲慶子

草の穂を幽か撓（たは）ませあきあきつ生命一つを乗せてさ揺らぐ
上江洲慶子

永き日を物思ひつつ縁側に佇むしばし老いづくわれか
楚南弘子

また長野県の**「ヒムロ」**は「アララギ」の系統を引き、写実の中に生きる意志を投影した秀歌を紡ぎ続けている。895号から——

紫に夜明けを霞む高社山白雲ひとむら山肌のぼる
武田良文

吹かれ来て戸口に溜れる栗落葉日に輝きて霜の溶けゆく
中山やすゑ

アララギの枝伸び立ちて生る朱実含みながらに故郷思ふ
山口澄子

眼を凝らして見れば、真の短歌はまだ生きている。

（五十嵐勉）